

### (3) 有明海における干拓の変遷

有明海においては、江戸時代以前から干拓が続けられており、これまでに全体で 260km<sup>2</sup> を超える面積の干拓が行われてきたが、その干拓速度は昭和後期に大きく増加（図 3.7.2）。

- ・江戸時代：415ha/10年
- ・明治～昭和10年代：435ha/10年
- ・昭和20年～30年代：650ha/10年
- ・昭和40年～50年代：1,950ha/10年

有明海のうち佐賀平野沖や白石平野沖の干拓面積をみると、江戸時代 5,928ha（220ha/10年）、明治時代 924ha（231ha/10年）、大正時代 272ha（181ha/10年）、昭和前半（1955年まで）730ha（243ha/10年）と、10年あたり 200ha 前後の干拓が行われてきたが、1955年から 1980年の間は 3,209ha（1,284ha/10年）と干拓速度が急増。

また、1997年には諫早干拓事業により約 3,500haの海域が有明海から失われ、約 1,500haの干潟が消失した。

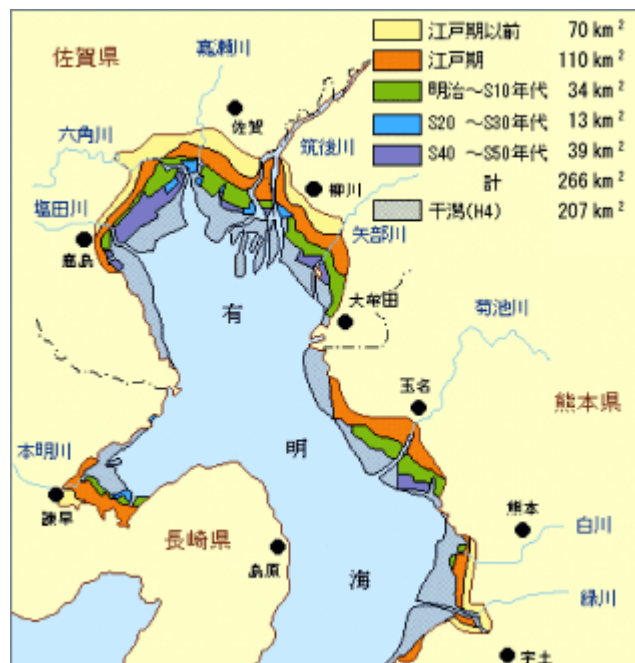


図 3.7.2 有明海における干拓の歴史

### (4) 有明海・八代海における自然海岸

有明海、八代海の自然海岸の延長は、1978年度調査時は各々100km、350kmであったが、1996～1997年度調査では 89km、315kmに減少している（別添資料 21）。八代海、有明海は人工海岸の比率が各々55%、45%と高く（全国平均 33%）特に熊本県の人工海岸線は 59%に達し、大規模な港湾、臨海工業地帯を有する福岡県（同 61%）とほぼ同じであり、人工海岸の占める比率の高さが指摘されている（別添資料 22）。

## 8. 赤潮

赤潮生物は、種類によってその生理的・生態的性質は異なり、水産生物への影響も違うことから、各々の特徴を記した上で、赤潮発生の状況、赤潮による漁業被害の概況を以下のとおり整理した。

### (1) 赤潮（種類別）の特徴について

#### 小型珪藻（年中発生）

基礎生産者として重要であり、食物連鎖の根幹をなすので、これらの赤潮はある程度やむを得ないであろう。これらの種は、河川から栄養塩が供給されて塩分が減少し、強い照度を与える晴天が続くと底泥中の休眠期細胞が発芽、繁茂して赤潮となる。（図 3.8.1）。透明度の上昇は発芽機会の増加につながり、赤潮の増加の原因になると考えられる。

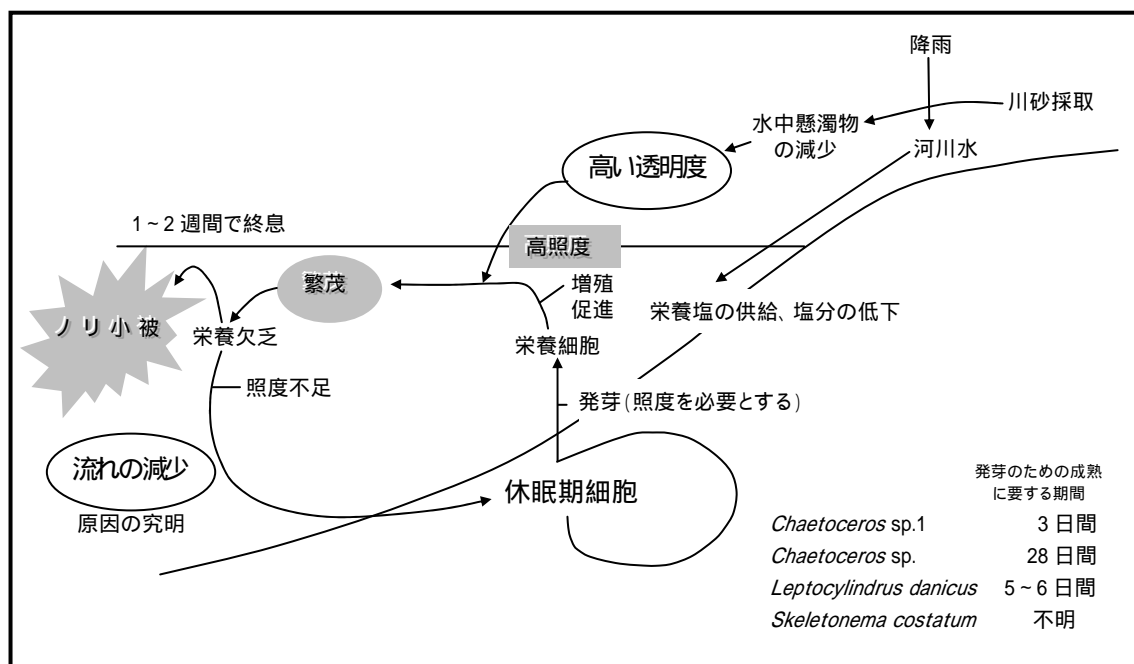


図 3.8.1 小型珪藻類の発生機構

### 大型珪藻（秋季～冬季発生）

大型珪藻の *Rhizosolenia* 属は有明海において 1958 年、1965 年、1980 年、1996 年、2000 年に赤潮を形成してノリに被害を与えた。2000 年に有明海で大発生した *Rhizosolenia imbricata* は毎年観察され、2000 年前にも赤潮レベルに達した。*Rhizosolenia imbricata* は外海に生息し（休眠期細胞が発見されていない）、低塩分の夏季には湾内への進入が阻まれるが、高塩分状態（30～35‰）になるとときに湾内へ進入して高い日照条件下で大発生する。大型珪藻は特殊な環境条件が整った時に大発生する赤潮である（図 3.8.2）。

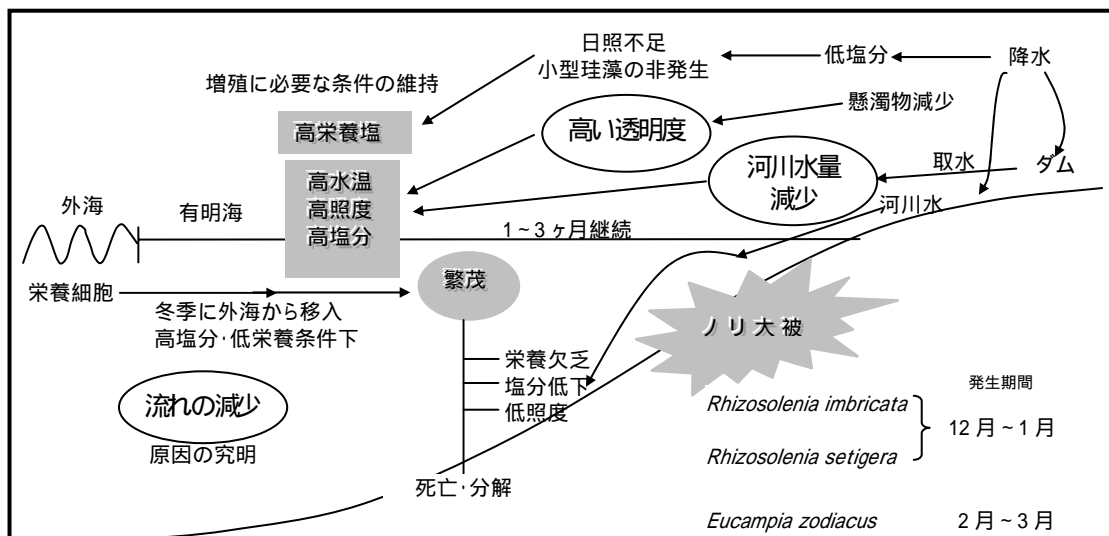


図 3.8.2 大型珪藻類の発生機構

### ラフィド藻（夏発生）

*Chattonella* 赤潮は、魚類と貝類に被害を与える。*Chattonella* 赤潮は有明海湾奥西部海域や諫早湾での発生が顕著であり、富栄養化や貧酸素水塊と関係している。1989 年に諫早湾で最初の *Chattonella* 赤潮が確認されたが、工事による人為的な底泥の攪拌が関係した可能性がある。貧酸素水塊の形成により底泥から鉄が溶解し、貧酸素水塊が崩壊で窒素やリンと一緒に鉄が供給されると、*Chattonella* 属の増殖が促進される（貧酸素水塊の解消のための底泥の攪拌についてが、この点への配慮が必要である）。*Chattonella* 赤潮による漁業被害を減少させるためには貧酸素水塊の形成を抑えることが重要である。

また、八代海での *Chattonella* 赤潮は 1988 年に初めて記録されたが、この頃は熊本県の宮野河内湾などの底質 COD が水産用水準を超え、養殖場の底質の硫化物濃度と水質の DIN と DIP が最高値を示した時期に当たり（別添資料 23）富栄養化の進行時期に本属が定着した可能性を示唆している。

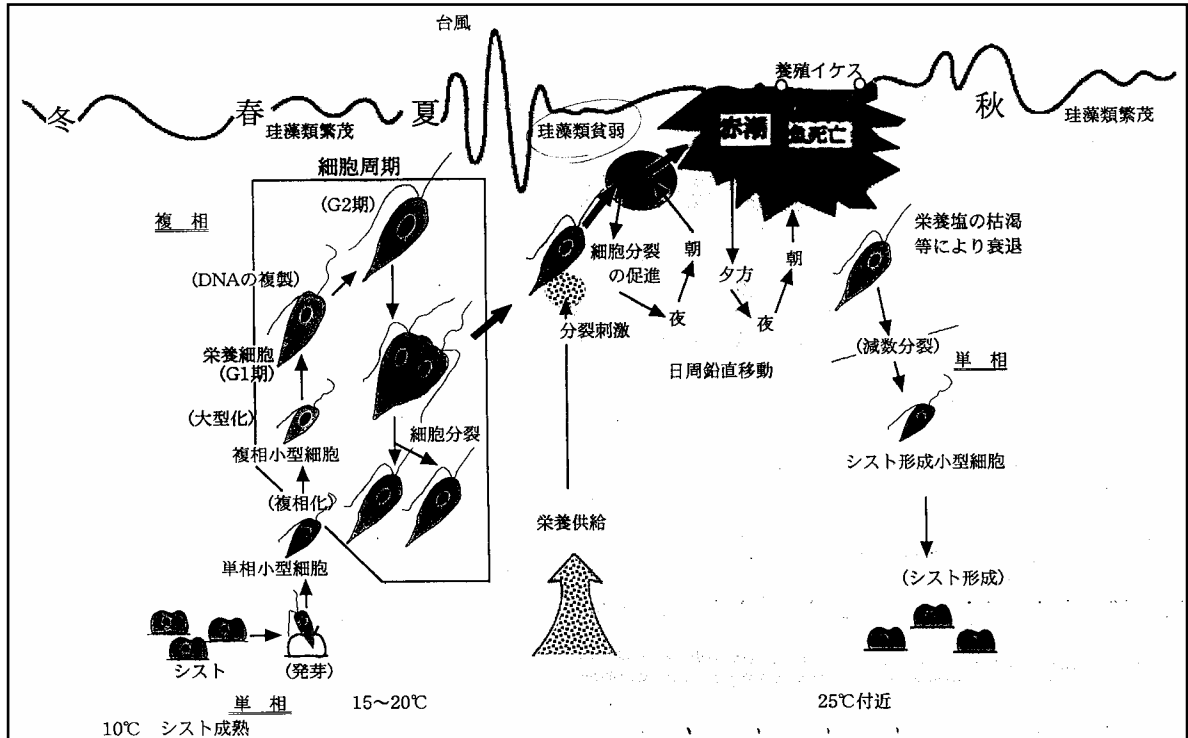


図 3.8.3 シャットネラの生活環と赤潮発生機構

#### 渦鞭毛藻（夏発生）

渦鞭毛藻類 *Cochlodinium* 属は八代海で大規模な赤潮となって重大な漁業被害を招き、御所浦や津奈木周辺での発生が多い（別添資料 24）。*C. polykrikoides* のシストは八代海では確認できず、冬期に遊泳細胞（単細胞）の存在が認められている。本種の seed population は越冬栄養細胞である可能性が高く、栄養細胞は水温と日射量の増加とともに高塩分環境下で増殖して赤潮形成すると、1.4~3.6m/h の速い日周鉛直移動により底層の栄養塩を利用して赤潮を持続すると考えられる。赤潮の消滅後、本種は栄養細胞で越冬すると思われる（図 3.8.4）。

*C. polykrikoides* は、塩分変化に敏感（狭塩分性種）であり、赤潮は湯水年に発生し、降雨年で非発生であることが示唆される（別添資料 25）。八代海では 2000 年夏期に *C. polykrikoides* の赤潮により約 40 億円の漁業被害が生じたが、このときの水温と塩分は 24.5~26.6、32.0~33.0psu、増殖速度は 0.37day<sup>-1</sup> であり、室内実験の最適増殖速度とほぼ一致した（別添資料 26）。赤潮発達期に水深 10m 付近で水温・塩分躍層が形成され、赤潮衰退期以降は崩壊していた。赤潮形成期の底層水には高濃度の栄養塩が分布していたが、これらは底泥から溶出して貯蔵されたと考えられる。このときの *C. polykrikoides* の赤潮は御所浦、津奈木で初期発生し、その後、分布を拡大させた（別添資料 27）。

なお、本種は有明海でも出現海域が拡がり、赤潮を形成するようになっている。